

## 山下洪文（やました こうぶん）



アルベール・カミュは、文学賞の審査委員をしていた頃に、「小説には奇蹟がなければならぬ」と言っている。「小説には魅力的な謎、現実では起こりえない偶然がなければならぬ」という、若い書き手への技術指導のように見える。だがこの言葉は、つぎのように読み解けないだろうか。「小説（芸術）という奇蹟をとおして、作者が、そして読者が救われなければならない」と。

今回応募された三十八篇は、前者の意味での「奇蹟」は巧妙に描かれている。高橋香菜「憎らしい海」の殺人者を抱きしめてしまう終幕、伊藤咲良「本能」の「大樹」にまつわる自殺の真相など、どんでん返しが綺麗に書けている。

だが、後者の意味での「奇蹟」はどうか。救いに値する言葉を書

けているだろうか。人を鼓舞する詩を書くとか、明るい小説で社会に貢献せよというのでは、無論ない。己の傷を見つめることでしか、自己も救えないし、他者も癒せはしない。

そうではなく、書くことが己の救いとなるように、己が救われるすがたが他者の救いとなるように書かなければならぬ、と思うのだ。ここでいう救いとは、普通の人には絶望や奈落のことであるかもしれない。それでも、これだけは手放さえない自分のものだ、と信じられるものがないければ、人の胸を打つ作品は書けないだろう。

梅村たお「わたしの青」は、最果タヒ流の文体で「青春」を描いたものだ。上手なのだが、「世界」を稀釈し、抒情化する最果の詩法は、無限に書けてしまう。そこで、最果の最初の詩集『グッドモーニング』の精読をお勧めしたい。彼女がいま語ろうとしない傷が、そこに克明に刻まれているからだ。現在に至るまでの膨大な詩集は、すべてその傷から流れ出た血を稀釈・濾過したものにすぎない。

おなじく梅村たお「春が来る」は、優しい文体で祖父の死を描いたエッセイ小説である。「物語」になっていない（と

いうのは、魅力的な謎や不安がないということだが）点は不満であるが、この素直な感性は大切にしてほしい。

重元かのん「地球に住む人間は幸せ」は、心の揺らぎを端正な文体で描けている。「地球みたい」／私は電子レンジ宇宙に向かって吠いた」などの詩的表現が効いている。ただし、もうひと展開ほしかったし、タイトルは「おいしい地球の作り方」の方がよかったと思う。

福田紗也「ブラックジョーク」は、タイトルのおり悪ぶざげにも似た疾走感があり、愉快に読めた。ただし、地の文がまだ粗い。疾走するためには地上（地の文）がしっかりしていなければならぬ。このテーマを、確固とした技術を基に書いたなら、完成度の高い不条理小説になったと思う。

全体的に、小説のレベルが高くなってきた。短い紙数のなかで、読ませる展開を作れているし、詩的表現の純度も上がっている。ただし何処まで「実感」で書いて、何処から「空想」で書くのかの線引きが、うまくできていないケースが多い気がした。殺人や戦争や災害といった、体験していない事柄をどう描くのか？ また、日常のつまらない出来事を、

どの程度まで書けばよいのか？ ヒントとしては、空前絶後の出来事ほど、「実感」に即して書くことよい。平明な日常には、幻想の毒を流し込めばよい。

安岡章太郎は、戦地における排便の苦労を書いている。ドンパチよりも、この「体」のことを描いたのだ。反対に、優れた幻想小説家は、日常をふいに非日常へ接続する技術に長けている（濫澤龍彦等）。何処までも幻想で押していけないこと。ときに身体性（この「私」の感じ・考え）をあらわにすること。

そして何と言っても、芸術とは自己への旅であるということ、忘れずにいることだ。先日亡くなった山田兼士先生に「あなたの詩はすべて、言葉への恋歌です」と言われたことがある。言葉とは自己から生れるものであるから、「自己への恋歌」と言ってもおなじことだろう。言葉は自己から生れ、自己へ帰ってゆく。しかし帰ってゆく自己はより深い、より本質的な「自己」である。この繰り返しのよって、人はほんとうに「自己」となっていくのだと思う。

今回、私が最終候補作に推したのは、熊谷響「蚕」である。「ほとくの家には、もう一匹家族がいました。否、もう一匹

どころか、もう何十匹もいました。それは蚕といいました」……といった魅力的な語り口調といい、グロテスクかつ繊細な描写といい、蚕を死なせ、土に埋め、孤独に帰るラストといい、すでに「文体」を掴みつつあることをうかがわせる。

他にも秀作はあり、どれを推すか迷ったが、表現者の最大の使命は文体の確立であると考え、「蚕」を選んだ。以下、候補に入れかけた作品について、講評を簡単に述べる。

小宮山愛実「蛹」の「少年の蛹は酷く冷たかったことに加え、大ききの割に随分重かった。少しばかり指圧を強めて膜に包まれた体に触ると、冷たさをより深く感じた。おそらく、少年の内側に冷たさの根源が潜んでいるのであろう」という幻想的描写には、大きな可能性を感じる。ただし、全体が萩尾望都のような耽美的世界観に浸されており、それがやや不満であった。美しさが壊れるときに「官能」が生じる、と養老孟司は言っている。小説には「美」と「官能」、そしてそれを楽しませるための精巧な舞台装置が不可欠であろう。その点で、あと一歩であった。

香田朝「生と夢幻」は、「芸術という

大海に酔いしれ」た二人の少女の自殺未遂を描いている。死にそなった二人は最後、「本当の死なんてかいたやだめよ（略）死が綺麗だなんて、ただの生きてる人間の夢幻よ」「その夢幻をかくのが芸術家なのね」「そのためには生きなくちゃ。おかしな芸術家ごっこは、もうお終い」と語り合う。平凡ではあるが、真理だと思ふ。「轟轟と黒い松の木」など、優れた詩的表現も見られ、今後を期待させる。話し合いの結果、「蚕」と、浅沼璞先生が推された清水野乃子「お守りとしての」が佳作ということになった。受賞には至らなかったが、二氏の将来に期待したい。

賞を取ることに実存的意味はない。それはいかに生き続け、書き続けるかという終わりのない問いの、オマケのようなものにすぎない。賞レースにかまける者は、鼻にくくりつけられたニンジンを食べ、鼻として走る馬に似ている。人生の目的はニンジン（オマケ、賞）ではない。このどうしようもない「いま」を、生き抜くことだ。入選者も落選者もそのところを取り違えず、自己にとって大切な問いを手放さず、今後も書き続けてほしいと思う。